

し、おさえ取る必要があると思うし、清澤の時代的背景についても今少し幅広く、系統的な叙述があれば、より判然としたかとも思う。しかし乍ら本書は、このような望蜀の要求に拘ることなく、厳密な研究の論著として劃期的な意味を持つものであり、より以上に啓蒙的な意味に於て重要性を持つことを強調したい。即ち、先に云つた如く、本書の希求する現在の、未來の意味に於てである。清澤が身を以て歩んだ苦惱の道と、宗教的な自主性の樹立、その眞宗的傳統を背負つての主體的信の確立、その場としての宗門への無限の愛情等々、われわれに投げかけ、われわれの内面の琴線をゆり動かす問題を、本書は多く語りかけている。そして、特に本書に宗門的な願いのこめられて、それを強調して、敢て本書を推す次第である。(昭和三二・一一、東本願寺内教化研究所刊、¥・五〇〇)

(柏原)

大乘佛教瑜伽行の研究

野澤靜證著

本書は解深密經の「分別瑜伽品」(チベット譯の聖者慈氏章第八)の研究を主體とし、瑜伽行派における瑜伽行の内容を考察したものである。解深密經にたいする注目すべき研究としては、エチエンヌ・ラモート氏のフランス譯、西尾京雄先生による「無著の解深密經疏の和譯と研究」(佛地經論之研究大谷學報第二十二卷1、3)、稻葉正就氏による「圓解深密經疏の散逸部分の研究」をわずかにあげうるのみであるので、この著者の研究は、甚だ貴重である。解深密經の研究が、他の瑜伽唯識の論書の研究に比してわずかであるのは、現代の佛教學が經典の研究よりも論書の研究に主きをおく傾向のあらわれかもしれない。しかし、勿論、これは良い傾向でない。周知のように、解深密經は瑜伽行派の教義の構成に重大な關係をもち、瑜伽行派において最も重要視される經典である。瑜伽行派の教義は解深密經を中心に開展したといつてもよい。したがつて、瑜伽行派の教義の源流をたずね、その思想的性格をさぐるには、何としても解深密經が研究せられ、その内容が明らかにされねばなら

ない。ことに、本書のように瑜伽行派における瑜伽行の内容をさぐるには、解深密經の「分別瑜伽品」の研究は、すこぶる重大な意義をもっている。「分別瑜伽品」は、唯識の教證として常に引用される(識所變唯識所現)という有名な言葉の出ずる一章であるが、唯識の理論というよりは唯識の實踐的な觀法である瑜伽行の詳細な内容を説き、唯識説を瑜伽行において語るところに特色をもつた重要な一章である。我々は、このような重要な解深密經の一章の研究が推進されたことに、まず衷心より喜びをあらわしたい。

「分別瑜伽品」にたいする著者の研究は、チベット譯「聖者慈氏章」(分別瑜伽品)の經文と、これにたいする覺通(Byan-chub rtsu-pphrul)と智藏(Jñānagarbha)との註釋を和譯して、これに註記を附するといふ、原典解明の方法をとっている。このような和譯と註記による原典解明は、「分別瑜伽品」にたいする最も客觀的な基礎的研究であらう。梵語原典が発見されない解深密經にとつては、梵語原典の直譯態としてのチベット

譯が、非常に大きな價值をもつており、また、チベットに傳わるインド撰述の註釋が、經典の本文を読む上に甚だ有益であるからである。チベット譯による原典解明がすぐれた客觀的な研究方法であることは、山口教授と著者との協同の「世親唯識の原典解明」や、山口教授の「世親の成業論」に、すでに明らかに示されており、ここに改めて詳しく述べるまでもない。著者は本書において、これらの先者に見られると同様の態度をもつて、分別瑜伽品の原典解明に努力をかたむけている。かくして、著者の努力によつて、分別瑜伽品はきわめて読みやすい正確な和文テキストの如き形態に、あらわしいだされている。著者の譯文には全く生硬の感がない。しかも、覺通と智藏との註釋によつて、本文の語句の一行がリテラリーに解釋され敷衍され、分別瑜伽品の全體が具體的に擴充されており、これによつて我々は瑜伽行の次第、規定、狀態、内容などを詳細に知ることができ。ことに、覺通の註釋は、瑜伽唯識關係の主要な諸論書の要文を引用し、或いは、要旨を述べるという仕方にあるの

で、我々はこれによつて大乘佛教瑜伽行の源流と、その展開の跡とをたどらしめられる。分別瑜伽品の漢譯をかえりみるときに、我々は著者の研究の功多きをひとしお強く感ずるであらう。

從來、瑜伽行派の教義の研究は、殆んど唯識の理論とか説明、或いは、思想史的立場の研究にかぎられてきた。しかし、唯識は實踐的な唯識觀をはなれてはありえないから、唯識の研究には瑜伽行の研究が詳細に行われねばならぬであらう。インドにおいて、唯識派という言葉よりも瑜伽行派という言葉が廣く使用されるのは、明らかに瑜伽行の重大さを示すものである。著者は、序説においてこの點を強調し、「瑜伽行を離れた唯識思想のみを説くことは、陸上において泳法を習うにたとえられよう」ときびしく述べている。かような意味において、本書は分別瑜伽品を原典的に解明したということとどまらず、從來の唯識佛教研究をのりこえて、唯識佛教の新しい領域への突入を試みた意欲的な勞作であるといつてよい。なお、本書には分別瑜伽品の原典解明のみならず、序章において、瑜伽師

地論や大乘莊嚴經論などにより瑜伽行の意義、源流、展開などに關する研究が加えられており、我々に瑜伽行にたいする研究の課題について教える所が多い。著者の今回の發表により、瑜伽行から見た唯識說の研究が急速に進展せしめられるであらうと思う。我々は、梵藏の豊富な語學的知識を必要とする困難な業作をなしたげた著者の勞に、滿腔の敬意を捧げたい。

(三二年三月刊・A5本文四三五頁・

索引、及びチベット文(智藏の註釋)

一三八頁・一三〇頁・京都、法藏館)

(安井廣濟)